

# Newsletter for JADR

## I. 国際歯科研究学会日本支部 (JADR) 会長としての御挨拶

JADR 会長 高田 隆

(広島大学医歯薬保健学研究院)

2015年1月より、高橋信博前会長の後任としてJADR会長に就任いたしました。もとより微力ではありますが、JADRの発展のために新執行部の皆さんとともに努力したいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

さて、3月10日から15日にボストンで開催された第93回IADR総会学術大会は、世界各国から6000名を超す参加者が集い功裏のうちに幕を降ろしました。我が国からも年度末で入試等何かと多忙な時期にもかかわらず、多くの方々が参加されていました。今回のIADRボストン大会はJADRにとって特別な意義がありました。それは、安孫子宜光先生がIADR会長として開催された大会であったということです。IADRは1921年に発足し、爾來90余年の長い歴史があります。この間、JADRからは作田守先生と黒田敬之先生がIADR会長として選出され、IADRの歴史に金字塔を打ち立てておられます。今回、安孫子先生もIADR会長のご大役を見事に務められ、JADR会員としても誠に誇らしく思い出に残る大会でした。

IADRに参加する度に思うことは、歯科医学医療の科学的な方向性をIADRが歯学研究の国際基幹学会としてリーダーシップをとって世界に示していることです。1954年に発足したJADRはIADRの中で、アメリカとイギリスについて3番目に長い歴史を有し、規模もアメリカに次いで2番目に多い会員数を誇っています。前述のように3人のIADR会長がJADRから選出されJADRのpresenceを示していただくとともに、最近では各種委員会に積極的に委員を派遣していますが、JADRの歴史の長さや規模、さらには我が国における歯科医学・医療のレベルからすると、IADRにおけるより大きなresponsibilityを担い、歯学研究の推進にさらに大きな役割を演じることができるのではないかと思います。では、そのためにJADRとして何をすべきか、という課題に直面します。この課題は歴代のJADR会長が常に取り組みされてきたものであり、今更の感もありますが、会長に就任させていただくに当たり改めて考えてみたいと思います。

IADRやAsia Pacific Region (APR)の大会では、今回のボストン大会や一昨年にバンコクで開催されたAPR大会でみられたように、国内で開催されるJADR総会学術大会に比べて、海外の学会の方がむしろ多くの参加者がいます。昨年、IADR本部のFox執行役員がJADRに参加された時の感想として、発表の研究レベルや英語による発表は素晴らしくJADR

に敬意を表するが、会員数に比較して学術大会への参加者が少なすぎるのではないかというコメントを残されました。現在の会員登録システムでは、JADRの会員数はIADRに登録された日本人会員の数に大きく影響を受けます。そして、IADRの登録者数はIADR学術大会の開催地や開催時期により大きく変わります。JADRの50周年誌 ([http://jadr.umin.jp/newsletter/doc/memorial\\_issue\\_2.pdf](http://jadr.umin.jp/newsletter/doc/memorial_issue_2.pdf))の中で黒田先生が指摘されているように、JADRの会員数はIADRの他のdivisionとは異なり、流動会員が極めて多いという特徴があります。すなわち、観光地として魅力的な場所で開催されるIADR大会には参加者が多く、結果としてその年度はJADRの会員数も増えますが、会員としての更新をされない方が多く、JADR国内大会にも自ずと参加者が増えないという構図になっています。換言すると真の意味でのJADRならびにJADRの会員となっていないと言えます。

IADRは世界の歯科医学研究の中心に位置する学会であり、JADRはその日本部会です。このポジショニングについて歯科医学研究を担う歯科大学、歯学部先生がたに今一度ご理解いただける努力と仕組みを見直す必要があると考えます。例えば、歯学医学教育については歯科大学、歯学部の代表が一堂に会する機会として、歯科医学教育学会の主催する総会、学術大会があり、歯科医学教育の現状や方向性についての議論がなされています。一方、歯科医学研究について領域横断的に、歯科大学、歯学部の代表が一堂に会して議論する場は十分に用意されていないように思います。JADRは領域横断的な数少ない学会であるという特徴を持っています。先の黒田先生の書かれた記事によると、2001年にはIADR/JADR大会に連動して、全国の歯科大学長、歯学部長が集まる機会があったが、その後は連動した開催はないとのこと。All Japanで歯科医学研究の方向性を考えるプラットフォームとしてIADRの部会であるJADRを位置づけることができるかどうかを、改めて検討させていただきたいと思います。

IADRではリサーチグループを基盤とした研究発表が行われており、前述のように、領域横断的に最新の情報交換の場となっています。JADRもこの特性(魅力)を生かして、JADRに参加すると歯科医学研究に関する最新の情報が領域横断的に得られると思っていただくためのプログラムの一層の工夫によって、JADRへの加入や定着を図る必要があります。

IADRの部会を有する国では、その国における歯科医学会との連携を密にし、歯科医学の発展と口腔保健の向上に貢献しています。歯科医学会の主要な構成員である開業歯科医の先生がたにとってIADR/JADRを身近に感じていただくように、IADR/JADRに対するご要望を伺うとともに、安孫子IADR会長のご提案で設けられたaffiliate member制の広報等に努めたと思います。

JADR学術大会にはIADR会長やIADR韓国部会(KADR)の方をはじめとするAPRの先生がたが参加されます。我が国の研究機関の先生がたと海外の影響のある方との懇親を深める場となっています。また、JADRは数年前から完全に英語による運営を行っています。Hatton Awardをはじめとする賞の選考は、IADR本番での上位入賞を想定した発表と質疑応答を行っており、非常にレベルの高い若手研究者をIADRに送り出しています。さらに、地域にあっては、JADRはAPRとの

連携を図っています。2016年6月には第94回IADR総会、学術大会が第64回JADR学術大会、第3回APR総会学術大会ならびに第35回KADR総会学術大会との併催で、ソウルで開催されます。また、2018年には第4回APR大会が第66回JADR総会・学術大会と併催でプリズベンにて開催されます。いずれの大会にも、JADRからの提案でシンポジウムやワークショップが企画されます。急速に発展するアジア・太平洋地域に根差した歯科医学の発信をしています。これらのJADRの活動をより広く知っていただく工夫をさらに続けて参りたいと思います。

JADRの会則にある、「本会は歯科医学および関連分野の研究の促進を図り、口腔保健の向上に寄与するとともに、国際的視野にたつてIADRの発展に貢献し、社会の公益に寄与することを目的とする。」を遂行すべく、努力したいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

## II. JADR 会長任期を終えて

2014年12月末日をもちまして、2年の会長任期を終えました。大過なく任期を全うできましたのは、会員の皆様のご理解とご支援の賜です。また、理事の皆様には、大変お忙しい中、献身的に会務を支えていただきました。この場をお借りしまして、心より御礼を申し上げます。

私がこの2年間に取り組んだことは、(1)急速に拡大した学会事業の運営体制を整備すること、(2)国外的にはIADRおよびAPR(Asia-Pacific Region)において日本のプレゼンスを示すこと、そして、(3)国内的には日本歯科医学会との連携を意識しつつ国内学会として位置付けを明確化することに集約されます。あくまでも「取り組んだ」ということであり、未解決の課題やその過程で明らかになった新たな課題も多々あることは言うまでもありません。JADRの今後に期待しつつ、これら3点について纏めてみたいと思います。そして最後に、僭越ではございますが、今後のJADRの方向性ととも若手研究者へのメッセージを記したいと思います。

### 1. 事業の拡大と運営体制の整備

JADRの学会事業は、IADRのDivisionとしての事業とJADR独自の事業に大別できます。前者においてはIADRにて決定された事項の具体化、後者においては国内学会としての特徴の明示とその具現化となります。前者に関しては、Hatton Awardに加え、Joseph Lister Awardが新設され、2014年には輪番でJADRがIADR John Gray Fellowshipの対象となり、それに応じた規定の作製・整備を行いました。さらに、新たな会

## JADR 前会長 高橋 信博

(東北大学大学院歯学研究科口腔生化学分野)

員資格として2014年よりAffiliate membershipが設けられたことに応じ、JADRにおいても規定の改定を含む会員資格の整備を行いました。本membershipによって臨床医として活躍されている先生方も気軽にIADR/JADRに参加いただけるようになりました。今後、研究と臨床の連携を進める上で、大きな役割を果たすことを期待しています(詳細は、<http://jadr.umin.jp/>をご覧ください)。

一方、JADR独自の事業としては、JADR大会・総会開催に加え、JADR/GC学術奨励賞とJADR Travel Awardがあります。JADR/GC学術奨励賞は、このところ応募者が急増しており、選考過程を2段階にするなど、規定の整備を行いました。JADR Travel Awardは、APRとの学術交流促進を目的としたAPR会員のJADR参加に対する支援事業です。当初、各Divisionとの連絡が難しく応募者は少なかったのですが、2014年は初めて全てのDivisionから応募があり、急遽、規定の整備を行いました。

学会賞等については、無理のないスケジューリングで受賞者の選考を進める必要があり、担当理事の先生方、審査員の先生方、そして事務の方々の献身的な努力で恙なく実施できたこと、心より感謝しております。

このように書くとお叱りが後手に回っているとお叱りを受けてしまいますが、この10年におけるJADRの急速な改革は、JADRが名実ともに「IADRにおける日本のDivision」となるために不可欠のことでした。始めた事業を継続して行くためには、規定とともに制度化し、体制整備の上、次代に引き継ぐことが重要だと思います。

## 2. IADR および APR において日本のプレゼンスを示すこと

会員数世界2位、常にIADR参加者数上位を誇る日本ですが、そのプレゼンスはあまり高くないと言われてきました。しかし、2014年から、安孫子宜光先生がIADR Presidentに就任され、大いにその手腕を発揮されています。各種IADR学会賞も、このところ日本人の受賞が目立ちます。2013年のIADR-APRバンコク大会においては、質の高い研究発表はもちろんのこと、JADR独自の学術シンポジウム開催をはじめ様々な局面でイニシアティブを取り、その成功に大きな貢献を果たしました。学術面はもちろんのこと異文化交流という面からも、日本の底力を強く感ずる2年間でした。「アジアの時代」と言われる今、このような国際活動を通して日本から情報発信していくことの重要性を強く感じます。

急速なグローバル化の中、多様性を認めながらイニシアティブを握ることは決して容易ではありませんが、案外、その役割を果たすことができるのは日本かもしれません。真の国際化とは、国内・国外という場に関わらず、様々な国や地域の人々と一緒に活動することであり、主義主張をぶつけ合うだけではないと思うからです。

## 3. 日本歯科医学会との連携を意識しつつ国内学会として位置付けを明確化すること

JADRは、その特異な運営形態から、日本歯科医学会の分科会とはなっていません。しかしながら、お互いの理事会に出席するなど、積極的に情報交換を行っています。また、JADRを「歯学研究、とくにIADRにおける国際渉外的組織」と捉えていただいております。日本歯科医学会には、IADRを中心とした歯学研究に関する年次報告を行っています。任期中、この関係をさらに発展させ、協働的に学術活動を行うことを模索し、基本的な合意には至りましたが、まだ事業として具体化されておられません。JADR国内学会を含むJADRの将来像を考える上でも極めて重要な課題であり、今後の進展に大いに期待するところです。

## 4. 今後のJADRの方向性と若手研究者へのメッセージ

JADRは国内で唯一の基礎研究から臨床研究にわたる歯学研究全体を対象とした国際学会です。このような多様性こそが本学会の最大の魅力であり、それを如何に活かすか重要な課題です。例えば、その多様性は様々な専門学会とコラボレーションする上で大きな力となるはずですが、専門性の高い国内学会と共催し、他研究領域との関連性を示す国際セッションを受け持つことなどが可能でしょう。また運営においては、IADRの各Scientific Groupの代表という観点から理事を選出し、Scientific Groupからの報告をもとにScientific GroupやIADR本部への要望・提案を行うことで、研究学会としての実質化が進むものと思います。

若手研究者を取り囲む状況も大きく変わりました。安定志

向が続いていますが、現代という変化の時代ではそれは「叶わぬ夢」であることの裏返しなのかもしれません。しかし、積極的に研究し、国際学会で発表し、様々な人々と交流し、いろいろな考え方に触れることはとても魅力的であり、研究者とは本来そのような環境で大きく育つのだと思います。勢い良く回っている「独楽」は、高いエネルギーを内在しながらも極めて安定しています。現代的な安定とはそのようなものではないでしょうか。

私がJADRに入会させていただいたのは大学院生の時であり、その頃は、学会とは「参加し発表するところ」と認識していました。しかし、学会は誰かが運営しているものであり、やがてそれが会員の務めでもあるという事実に気がきました。学会運営もまた有意義であり、いろいろなことを学ぶことができる貴重な機会であることは間違いありません。この2年間はそれを実感した時間でもあり、その時間を与えて下さった会員の皆様に改めて感謝しております。そして、若手研究者の皆様がIADR/JADRという舞台上で活躍されることを切に願っております。

最後になりましたが、私の拙い学会運営をしっかりと支えて下さった事務局の中倉さん、西山さん、緑川さん、山元さんに、深く心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

## III. 退任理事からの挨拶

### 1. 理事退任にあたり

佐々木啓一

(東北大学大学院歯学研究科口腔システム補綴学分野)

2008年から6年間、高野吉郎会長、村上信也会長、そして高橋信博会長のもと、微力ながら理事を務めさせていただきました。学務等で、会議や学術大会に出席できないこと等が多々あり、歴代会長や理事諸兄、そして事務局の皆様にはご迷惑をおかけいたしました。皆様の温かいご理解、ご協力により何とか職責を全うすることができました。皆様には大変感謝申し上げます。

さて6年間に渡り本会の活動を見てきましたが、歴代会長のリーダーシップのもとJADRは時代に対応し大きく変わったものと感じています。学術大会の公用語を英語にしたこと、またTravel Award設立などにより学術大会への海外からの参加者が増えたこと、これらによりポスター会場でも英語による討論が普通に見られるようになったこと、これらは本会の本来の目的である国際性の向上の具現化に他なりません。学術大会の完全英語化は、2010年、西原先生が大会長を務められました九州歯科大学での大会からでしたが、英語化について理事会でも種々の議論がなされました。先の大坂の大会

では、若手が堂々としっかりと英語で発表し、討議している姿が、当たり前前の光景として繰り返されてきました。今思えば、あの当時の議論は何だったのか、隔世の感を覚えます。また本会に期待される役割は、もう一つ、学際性です。いろいろな領域の研究者が集う本会では、学際的なシンポジウムを、俯瞰的な視点から開催することが可能です。これについても、このところの学術大会では積極的に取り組まれており、本会からの発信が、少しずつではありますが、できていると思います。

このところの理事会では、本会の活性化という議論が行われます。会員数の増加、大会参加者数の増加などが論点にはなりますが、人口が減少し、卒業する学生数、そして歯科医師数も減少している現在、これらは直接的な指標にはもはやありません。また本会の性質上も合わない感を受けます。JADRは、多彩な歯学研究領域のリーダー、将来のリーダーたる方々からなる学会であり、その活動方向に特徴を持つべきでしょう。優秀な研究者が高い国際性、学際性を身に付けるうえで、具体的には国際的な賞を受賞するためには、あるいは国際的なグラントを獲得するためには等、本会でしか、なし得ない方向性があると思います。今後、是非、特徴ある活動方針を打ち出し、そのうえで活性化を図っていただきたいと思っています。

山崎新会長、そして高田次期会長のもとでの発展を祈念し、退任の挨拶と致します。長い間、ありがとうございました。

## 2. JADR 理事退任ご挨拶

天野 敦雄

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座予防歯科学分野)

この度、理事を退任するに当たり、一言ご挨拶申し上げます。

2011年以來4年間にわたり、JADR理事会メンバーに加えて頂きました。JADR執行部および会員の皆様からはご指導ご鞭撻を賜り心よりお礼申し上げます。

退任挨拶では在任中の仕事ぶりを振り返るのが常ですが、私の場合、理事在任中の功績は？と問われれば、心苦しいことに言葉に詰まります。「何も無いのか！」と強く詰問されれば、お答えしないわけには参りませんが、些細な仕事ぶりを言い訳がましくご披露するより、理事会出席精勤に寄与した無病息災ぶりでお許し頂きたいと思っています。

思い出は何かと尋ねられれば、2013年、BangkokでのIADR Asia Pacific Region MeetingのWelcome receptionの壇上で、たくさんのJADRメンバーとスキヤキソングを熱唱したことです。迫力ある歌声とおぼつかないステップの微笑ましいステージングに加え、今里聡先生の名司会ぶりはアジアの大歓声を浴びました。日頃から宴会芸を隠ししておくことは日本のみならず世界のビジネスシーンで求められる心掛けであることを再確認させて戴きました。

日本の歯科医師を取り巻く環境や歯学部入学希望者の現況

は、我々アカデミアに身を置く人間にとっても憂うべきものです。歯学研究のあり方の変化、アジアでの日本の役割など、JADRを取り巻く環境は更に変化すると思いますが、各歯学専門領域の調和と国際化をミッションとするJADRの役割はますます重要性を増すことと思います。歴代の会長、理事の先生方のご努力により、JADRは年々活性化を遂げてきており、これからも新たな挑戦を続けて下さることと思います。

JADRが日本のアカデミアの更なるグローバル化を推進して頂きますことを期待し、今後はデンタルサイエンスの高度化を通して、微力ながらJADRのお手伝いできればと思っております。

高田新会長ならびに理事の皆様方のご活躍とご健勝、JADRのご発展を心から祈念して退任のご挨拶とさせていただきます。有り難うございました。

## 3. JADR 理事を退任するにあたり

柴田 俊一

(東京医科歯科大学大学院顎顔面解剖学分野)

このたび、2期4年間務めさせていただいたJADR理事を退任する事になりましたが、この間大変充実した活動をやらせていただきました。まずもって高橋会長、村上前会長を初め執行部の先生方に深く御礼申し上げます。私が高野元会長のご推薦もあって理事に就任させていただいたときは、私の故郷北海道にある北海道医療大学歯学部組織学分野に在職しておりました。理事会に出席するのに飛行機を使用させていただくため学会に経済的負担もおかけする事になり、恐縮しておりましたが、2011年10月より古巣の東京医科歯科大学に戻る事になり、経済負担は軽減した反面、私の地域的存在価値が減る事になったかとも感じておりました。理事としての活動でやはり一番の思い出はHatton Awardの審査委員を務めたことです。理事就任の挨拶で「IADRのHatton Awardを通して、本学会が若手研究者の登竜門となっていることは、よく知られています。昨今の歯学部状況は大変厳しいものがあり、研究学会活動も大いなる制約を受けている事は否定できませんが、そのなかでもやる気にあふれた、優秀な若手研究者は大勢います。私も可能な限りそのような若手をバックアップする所存です」と書かせていただきましたが、確かに若手研究者の発表はどれも素晴らしく、優劣をつけるのに本当に苦労いたしました。専門分野以外の発表では場合によってはわか仕込みで詰め込みを勉強して、辻褄を合わせたこともありました。しかしながら実際にIADR総会会場で発表した後各発表者と話をすると、皆様やりきったという非常に晴れやかな表情をしており、やはりこの賞の存在価値は非常に大きいものであると感じております。また理事を務めている間、IADRおよびIADR-APRにはすべて参加いたしました。震災直後のサンディエゴ、イグアスフオール、そしてケープタウンと印象的な都市での開催が多く、JADRの理事に就任し

ていなければ一生縁がないかもしれない場所に行けた事は、たいへんありがたい事であったと思っています。今後理事は退任いたしますがJADRおよびIADRと縁が切れる訳ではありませんので、若手を連れて積極的に学会に参加させていただきたいと考えております。本学会のますますの発展を祈念しております。

## 4. 学術奨励賞の選考を担当して

桃井 保子

(鶴見大学歯学部保存修復学講座)

JADR理事を2期4年間務めさせていただきました。この間、村上伸也元会長、つづく高橋信博前会長のもとで、学会の重点活動であるJADR/GC学術奨励賞の選考を担当いたしました。今、あらためて、4回の学術大会を通し、各大会ごとに7名指名させていただいた理事の先生方に心より感謝申し上げます。この賞は、学術大会での研究発表活動を奨励するとともに、歯学の発展に寄与する若手研究者を育成することを目的に、2004年から施行されています。受賞対象者を38歳未満としており、表彰時にはYoung Investigator Awardの英名称を使用しています。JADRはわが国の歯科医学のグローバル化牽引の役割を担うべきとの理事の共通認識から、2007年大会より候補者の発表や審査時の質疑応答は英語を使用することに決めました。実施当初は、発表と審査が英語のみでは双方の議論が尽くせず公平な審査ができないなどの感想も聞かれましたが、今は、国際化は避けられない流れとし、英語使用常態化に向け発表者・選考委員双方の努力が続けられています。また、2012年からは、株式会社GCのスポンサーシップを得て、名称をJADR/GC学術奨励賞と改め、毎年5件以内の受賞者を決定しています。

本賞の選考規定においては、応募者が10名を超える場合は事前書面審査を行うことと定められていますが、長いこと応募件数が10件に満たない年が続いておりましたが、昨今は、毎年20名以上の応募があり事前審査が実施されています。この盛況ぶりは、わが国の若手研究者とその指導者が世界レベルの学術活動に高い関心を寄せてきていることの証であり、学会として何より喜ばしいことです。昨年は、事前書面審査で選抜された候補者が全て女性であったこと、またその英語発表能力が極めて高かったことに驚かされました。そんな中での選考委員の悩みは、いずれの発表もレベル高く甲乙つけがたいというありがたいものでした。一方、4年間本賞の選考にかかわっての率直な感想を申し上げますと、本家IADRにおいては各表彰が30ほどあるScientific Groupがカバーする広い領域から選抜されている感がありますが、JADRにおいてはこのところ、臨床研究、疫学調査、歯学教育、口腔保健、歯科理工学などなどの分野からの応募がほとんど無く寂しい思いをいたしました。また、現在までの受賞者総数は45名ですが、そのほとんどが国公立大学に所属する研究者に集中し、私立

大学所属者は6名と少ないのが現状です。わが国の歯科医学会において、JADRの存在感が今一つなもの、こんな事に誘因があるのでとどの憂いも持ちました。ともあれ、今後も厳格で公平な審査によって選ばれる受賞者の顔ぶれそのものがJADRの学術レベルの高さを物語る事となるでしょう。

## IV. 第62回JADR総会・学術大会報告

### 1. 第62回国際歯科研究学会日本部会 総会・学術大会を終えて

大会長 村上 伸也

(大阪大学大学院歯学研究科口腔治療学教室)

平成26年12月4,5日の両日KKRホテル大阪を会場として、第62回国際歯科研究学会日本部会の総会・学術大会を開催させて頂きました。14カ国からの参加者を含む総数300名の皆様の参加を得、成功裏に会を終えることが出来ました。ここに厚く御礼を申し上げます。

例年通り、前日の12月3日には、理事会に引き続き、Dr. Christopher Fox (IADR Executive Director), Dr. Byung-Moo Min (IADR Regional board member), 安孫子宣光先生 (IADR 会長), 黒田敬之先生 (IADR 元会長), 作田守先生 (IADR 元会長) をお招きして懇親会を開催し、IADR/JADRの来し方行く末について和やかに意見交換する機会を得ました。

IADRにおいて世界第二の規模を擁するJADRのプレゼンスは会員の先生方も熟知されておられるところですし、JADRが世界の歯学研究の牽引力の一つになっていることも間違いありません。一方で、その研究が如何に将来の歯学や歯科医療の発展に貢献するのかを意識しておくことは、歯学研究者にとって大変重要なことと思います。今回はその重要性を意識して、学術大会のテーマを「Reconsidering the Importance of Clinical Relevance」とさせて頂きました。第60回の記念大会のスタイルを踏襲して、特別講演・シンポジウム・JADR代表のHatton Award候補者講演のみを口頭発表、一般講演は全てポスター発表とさせて頂きました。講演内容の詳細は、以下に譲りますが、いずれも素晴らしい内容のご講演で、両日とも多くの参加者の皆さんに来場頂きました。また、ポスター発表の会場においても、英語で討論している様子をそこかしこで拝聴することが出来、JADR学術大会が国際学会としての一躍を担っていることを実感することが出来ました。初めての国際学会としてタイから参加した学部学生達(日本で言うところの「基礎配属」で行った研究成果を発表してくれたようです)が、「初めての経験でドキドキしたけど学会が楽しかった、またこのような経験をしたい、学会が終わったら仲間と観光を楽しんでから帰国する予定である」と、楽しそうに語ってくれました。今後は、海外からの参加者もさらに増え

ていくでしょうから、そのことを意識したプログラム編成も求められるのではないのでしょうか。最後になりましたが、この度の会の趣旨をご理解頂きご支援を賜りました企業の方々にも御礼申し上げます。

## 2. Reconsideration of the Periodontal Medicine Research: Interface between Epidemiological findings and Pathogenic Mechanisms

山崎 和久

(新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野)

歯性感染症、とりわけ歯周病の全身に及ぼす影響が注目されるようになって久しい。Periodontal medicine なるネーミングにより新たな学問分野が樹立されたのもこうした流れを受けてのことである。一方で、因果関係については十分なエビデンスが得られていないとの指摘もある。このような背景を受けて、本シンポジウムでは病因メカニズムと疫学的データの両面から4名のエキスパートに講演を頂いた。

まず中山浩次先生(長崎大学大学院)からは演者らが *Porphyromonas gingivalis* に新たに発見した type IX secretion system (T9SS) についての知見が報告された。*P. gingivalis* の代表的な病原因子である gingipains や関節リウマチとの関連で注目されている Peptidylarginine deiminase なども T9SS により分泌されることから、新たな治療ターゲットとしての可能性にも触れていただいた。

松下健二先生(国立長寿科学研究所)からは歯周疾患とアルツハイマー病の関連について、動物実験データに基づき、口腔投与した *P. gingivalis* が脳組織から検出されること、脳内の炎症性サイトカインレベルが菌の投与により上昇することから、血行性に影響する可能性について論じていただいた。

荻原明弘先生(新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野)には歯周疾患と慢性腎疾患およびそれに随伴する骨代謝異常について豊富な疫学データに基づき講演していただいた。歯周疾患あるいは喪失歯数とクレアチンクリアランスあるいはシスタチンCレベルに有意な関連があること、それが骨代謝異常とも関連することを示し、歯周疾患と腎疾患の間には双方向性の関連があることを論じていただいた。

最後に登壇いただいた片岡伸介先生(ライオン株式会社生命科学研究所)には高脂肪食誘導肥満マウスにおいて歯槽骨吸収が促進され、骨塩量が低下する現象について、in vitro の実験結果から考察していただいた。歯根膜細胞と M1/M2 マクロファージの共培養実験から M1 マクロファージには IFN- $\gamma$  産生を介した骨吸収抑制作用があることを示していただいた。

これらの講演は Periodontal medicine 研究をさらに推進していく上で、示唆に富む有意義なものであり、聴衆の理解を高めるものであった。

## 3. New Frontiers of Bone and Mineral Research in Dentistry

西村 理行

(大阪大学大学院歯学研究科生化学教室)

山口 朗

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔病理学分野)

本シンポジウムでは、歯科領域ならびに生命科学領域において歯・骨に関する研究を先駆的に行われている、新進気鋭の4名の先生にご講演を依頼して、最新の研究成果を発表頂いた。

愛媛大学プロテオサイエンスセンターの飯村 忠浩先生(バイオイメージング部門)は、非常に鮮やかな in vivo イメージング技術を駆使して、脊索の発生過程における細胞周期の変動と骨細胞における DMP1 と FGF23 の発現パターンの2つのトピックスを紹介された。斬新な研究アプローチは、硬組織研究の新たな取り組みとして今後の展開にも大いに期待が持たれた。

大阪大学大学院歯学研究科の波多 賢二先生(生化学)は、超高速シーケンサーを活用し、内軟骨性骨形成過程において必須的役割を果たす転写因子 Sox9 のパートナー遺伝子として、転写因子 Arid5b を同定し、その機能解析について報告された。特に、Arid5b がヒストン脱メチル化酵素 Phf2 と会合し、Sox9 の標的遺伝子のエピゲノムを制御していることを明らかにした点が興味深かった。

新潟大学大学院医歯学総合研究科の大峽 淳先生(口腔解剖学)は、最新のマウスジェネティクスを駆使して、X 染色体連鎖性優生遺伝疾患、口腔顔面指趾症候群の原因遺伝子である *Ofd1* の菌の発生における役割を明解に示された。上皮間葉間相互作用を上皮系および間葉系の双方から *Ofd1* の重要性を示され、歯の発生の調節機構に関するチャレンジングな研究で印象的であった。

大阪大学大学院歯学研究科の山田 聡先生(口腔治療学)は、歯根膜組織を用いた Microarray や様々な遺伝子クローニングを行い、PLAP-1, GRIN3A ならびにカテプシン K が歯根膜細胞に高発現し、歯根膜の機能維持に必要であることを示された。さらに、PLAP-1 が歯根膜の再生医療への可能性を提示され、歯周疾患に対する新たな治療戦略の指針の一つとなり得ると期待される。

今回の4つの講演は、各々、異なるアプローチによって硬組織研究に挑む独創的な研究内容であり、我が国の口腔生命科学が世界トップレベルにあること明示したと思われる。また参加された JADR 会員にも有益かつ有意義な情報を紹介できたことを強くしている。本シンポジウムを企画する機会を頂いた大会長 村上 伸也先生ならびに、ご講演頂いた飯村先生、波多先生、大峽先生、山田先生に、心より御礼を申し上げます。

4. The new horizons for dental treatment opened up by biomaterials research

今里 聡

(大阪大学大学院歯学研究科 歯科理工学教室)

再生医療や組織工学の目覚ましい進歩とともに、口腔顎顔面領域の生体材料研究の分野においてもさまざまな新しいテクノロジーが登場して来ている。今回のシンポジウムでは、金属系、細胞系、レジン系、ならびに予防用器材の四つの観点から、最新の生体材料研究と新しい歯科治療の可能性について語っていただいた。

まず、埜 隆夫教授（東京医科歯科大学生体材料工学研究所素材研究部門金属材料分野）には、活性分子の固定化による金属材料の生体機能化についてお話しいただいた。Ti 表面への Poly (ethylene glycol) 固定化によるバイオフィルム形成抑制や RGD peptide による骨誘導能付与は、インプラントをはじめとする歯科用金属材料の将来像を提案する大変興味深いものであった。続いて、松本卓也教授（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科医用生体工学・生体材料学分野）には、細胞マニピュレーションに関する研究の成果と将来の方向性についてご発表いただいた。ハイドロゲルを利用した 3D 細胞パターンニングと硬組織形成の制御は極めて斬新で、既成概念にとらわれない生体材料研究のあり方を示すものであった。また、筆者は、実用化に成功した世界初の抗菌性接着システムの紹介をはじめ、抗菌性および組織再生誘導能等の生体機能性を備えたレジン系材料の開発研究について紹介し、予後良好な次世代型修復治療の概念について解説させていただいた。さらに、加藤啓介先生（サンスター株式会社オーラルケア事業部研究開発部）からは、新素材である熱可塑性エラストマーの予防用器材への応用について臨床的なデータも含めてお話しいただき、口腔衛生における材料研究の重要性を再認識することができた。

ショーケース的に異なるトピックスを紹介したうえで、近未来の歯科材料・生体材料について聴衆と幅広くディスカッションすることができ、材料研究が開く新しい歯科治療の可能性を感じられる大変有意義なシンポジウムとなった。

会におきまして、学術奨励賞を頂きまして、誠に光栄に思います。現在のところ、歯の喪失に対する治療として口腔インプラント治療が開発され、現在の歯科治療に大きく貢献しています。しかしながら、最近の幹細胞と組織工学技術を融合させた再生治療技術の発展に伴い、歯科領域においても天然歯が有する生理的機能を回復可能な歯科再生治療の技術開発が期待されています。

本研究ではインプラント治療技術を発展させて、歯の生理的機能を加えた新規機能性を有するインプラント治療概念を実証するために、歯周組織を付与したバイオハイブリッドインプラントの開発を行いました。発生学的に歯周組織に分化することが知られているマウス胎仔の歯小囊組織をインプラント体周囲に配置して移植することにより、歯周組織を有するインプラントの生着が可能であることを示しました。さらに、顎骨に生着した歯周組織を有するバイオハイブリッドインプラントは、周囲組織と連携可能な歯根膜機能を有していると共に、中枢への伝達能を持つ神経機能を有していることを実証しました。また、歯槽骨吸収を有する歯の喪失部位に対してバイオハイブリッドインプラントを移植したところ、垂直的な歯槽骨再生を伴いながら顎骨に生着することが示されました。

本研究成果は、歯周組織を再生しうる組織幹細胞と、現在のインプラント治療技術を融合させたバイオハイブリッドインプラントとして歯の生理機能を高度に回復させることを実証したものです。従来のインプラント治療の欠点を補う次世代の歯科再生治療として、患者の Quality of Life の向上に寄与するばかりでなく、再生医療への国民の期待という社会的背景に則した課題と考えられます。本研究における組織工学的手法による治療概念は、インプラントと歯周組織を結合させることにより歯根と同等の機能を再生する方法であり、幹細胞による組織再生療法、機能発現に適した人工材料開発、さらには、現在の欠損補綴治療技術を統合しうる次世代再生医療技術のひとつになることが期待されます。今後も歯科再生治療の実用化に向けて研究を進めたいと思います。

2. 2014 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して

太田 美穂

(九州大学大学院歯学研究院 口腔顎顔面病態学講座 顎顔面腫瘍制御学分野)

今回、大阪で開催された第 62 回 JADR 総会・学術大会において学術奨励賞を頂き、大変嬉しく光栄に存じます。

私は、「DNA microarray analysis of salivary glands involved in IgG4-related disease.」という演題で発表させて頂きました。研究対象である IgG4 関連疾患 (IgG4-related disease: IgG4-RD) は、21 世紀に日本から提唱された新たな疾患概念であり、血清 IgG4 高値と病変局所への著明な IgG4 陽性形質細胞浸潤を特徴とします。全身の諸臓器に及ぶこの疾患は、歯科だけではなく、



V. 2014 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して

1. Functional tooth restoration by next-generation bio-hybrid implant

大島 正充

(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 インプラント再生補綴学分野)

この度は第 62 回 国際歯科研究学会 日本部会総会・学術大

内科, 眼科, 耳鼻科, 放射線科, 病理など多分野でも注目を集め, 現在はオールジャパン体制で病因解明ならびに治療薬開発に向けて研究が進められております。このうち, 私たちは口腔外科領域の IgG4 関連涙腺・唾液腺炎 (IgG4-related dacryoadenitis and sialoadenitis; IgG4-DS) におけるヘルパー T (Th) 細胞に注目し, 病態形成に Th2 が重要であることを明らかにしてきました。近年では自然免疫応答の関与が示唆されていますが, 未だ不明な点も多いのが現状です。そこで, 本研究では自然免疫関連分子の同定のために DNA マイクロアレイにて網羅的遺伝子解析を行うこととしました。血液や小唾液腺を用いた網羅的解析はこれまでも報告はありますが, 今回検索した顎下腺は生検時に得られる検体で, 他臓器と比較してより侵襲が少なく, かつ重度の線維化やリンパ濾胞の過形成など IgG4-RD の特徴を有しており, 病態の把握には最も適した検体であると考えております。本解析の結果から, 1182 遺伝子に有意な発現変動を認め, そのうち IgG4-DS において発現上昇を認めた遺伝子群上位にあり, 自然免疫でも重要な役割を担うとされるマクロファージに発現する“macrophage receptor with collagenous structure (MARCO)”という分子を見出しました。今後はさらに他の候補遺伝子についても validation を重ねていき, 病態形成におけるメカニズム解明, さらに一つの治療標的としての可能性へとつなげていくことができると考えております。

今回, 国際的な場での発表という貴重な機会を頂き, 自身の研究成果を発表する責任とともに, 英語でのコミュニケーション能力不足を痛感致しました。特に, 英語での質疑応答は, 私にとって非常に不安が大きくとても緊張するものでした。多くの先生から御質問や御意見を頂くことができ, 大変有り難く思いましたが, 全てを理解できなかつたり自分の考えを上手く表現できなかつたりするもどかしさを感じることもありました。今後, 研究を進めながら, 英語の力も向上させていきたいと思っております。

最後になりましたが, 本研究遂行にあたり, 常日頃から温かくかつ真摯にご指導くださる九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面病態学講座顎顔面腫瘍制御学分野 中村誠司教授, 森山雅文助教ならびに御協力頂きました全ての先生方に心より感謝申し上げます。

### 3. 2014 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して

竹内 洋輝

(大阪大学歯学部附属病院予防歯科)

この度, 第 62 回 JADR 学術大会において発表いたしました「Involvement of Rab4A and VAMP2 in intracellular *Porphyromonas gingivalis* in gingival epithelial cells」という演題に対し, 2014 年度学術奨励賞を受賞することができました。このような賞を頂きましたことを大変光栄に思います。

我々の研究室では, 歯周病の主要な病原細菌である *P. gingivalis* の歯肉上皮細胞内での細胞内動態について調べてきました。歯肉上皮細胞を含む真核細胞内は細胞内小器官に満たされ, 特定のタンパク質や脂質をやり取りする物流機構が細胞機能にとって重要であることが知られています。細胞膜に存在する受容体やイオンチャネル等はエンドサイトーシスにより細胞に取り込まれ, リサイクリング経路により再び細胞表面に輸送されます。また, 細胞内の輸送小胞の融合は SNARE タンパク質に依存しており, 小胞を融合先となる膜に繋ぎ止め, 両者の脂質二重層が融合するのを助けています。

本研究では, 初期エンドソームからリサイクリング経路への輸送に関与するとされる Rab4A というタンパク質, および神経細胞においてシナプス小胞のエキソサイトーシスに関与するとされる VAMP2 というタンパク質に焦点を当て, 歯肉上皮細胞に侵入した *P. gingivalis* の細胞内動態との関連を調べました。その結果, 感染後 1 時間において歯肉上皮細胞に侵入した *P. gingivalis* は主に初期エンドソームに存在し, これらの菌は Rab4A または VAMP2 と共局在を示しました。また, Rab4A または VAMP2 をノックダウンした歯肉上皮細胞では, 感染後 4 時間において宿主細胞内の生菌数の増加および培地中の生菌数の減少を認め, さらに感染後 5 時間において初期エンドソームに存在する *P. gingivalis* の増加を認めました。また, VAMP2 は歯肉上皮細胞において, 輸送小胞の繫留因子である Exocyst Complex を構成する EXOC2 および EXOC3 と複合体を形成していました。本研究結果から, Rab4A および VAMP2 は, 歯肉上皮細胞に侵入した *P. gingivalis* の初期エンドソームからリサイクリング経路への輸送に関与している可能性が示唆されました。今後, Rab4A および VAMP2 の機能について, より詳細な検討が必要であると考えます。

今回の学会では, 他大学の先生方から多くの貴重な御意見を頂くことができました。今回の受賞を励みにし, 歯周病因論の解明のために日々研究に精進していきたいと思っております。

最後になりましたが, 本研究の遂行にあたり御指導くださいました大阪大学大学院歯学研究科 天野敦雄 教授, ならびに御協力頂きました先生方に, 心より御礼申し上げます。

### 4. 2014 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して

星野真理江

(昭和大学歯学部歯科補綴学講座, 口腔生化学講座)

この度, 大阪で開催された第 62 回国際歯科研究学会日本部会総会・学術大会 (JADR) におきまして, 「Endogenously produced persulfides enhance bone elongation」という演題で発表させていただき, 栄誉ある学術奨励賞を受賞いたしましたことを誠に光栄に存じます。学会会員ならびに諸先生方に心から御礼申し上げます。

私は歯科補綴学専攻の大学院生ですが, 基礎的研究にも興

味があり口腔生化学教室にて研究をさせていただいております。ここで、簡単ではございますが、研究内容を紹介させていただきます。硫化水素 (H<sub>2</sub>S) はその毒性が目立ちますが、中枢神経や循環器など様々な組織においては、内因性のシグナル分子としての生物作用を發揮します。さらに最近、H<sub>2</sub>S の薬理作用が硫黄原子の繰返し構造を持つ persulfide に変化することで發揮されていることが明らかになりました。そこで私たちは、マウス胎児脛骨の器官培養系と、初代培養軟骨細胞培養系に血液中に検出できる濃度の H<sub>2</sub>S を加え、骨伸長と成長板軟骨の形態的解析、そして細胞の増殖と分化について検討いたしました。その結果、H<sub>2</sub>S は骨伸長を促進させ、特に成長板軟骨の増殖軟骨細胞層を有意に伸長させました。また、H<sub>2</sub>S は初代培養軟骨細胞の増殖を促進しましたが分化には関与していませんでした。さらに、persulfide 産生酵素のひとつであるシスタチオニッペリアーゼ (CSE) が軟骨細胞で発現していることを確認しました。そこで CSE 阻害剤を培養液に添加したところ骨伸長と軟骨細胞の増殖が抑制されました。これらの知見は、persulfide が成長板軟骨細胞の増殖とそれに伴う骨伸長を促進する、軟骨における新たな内因性シグナル分子であることを示唆しています。今後、骨伸長のメカニズムに関する解析や *in vivo* での実験系の研究を進め、骨軟骨疾患の治療法の開発に寄与したいと考えております。今回、ポスタープレゼンテーションのディスカッションでは、私の拙い英語に耳を傾けてくださり多くの意見やアドバイスをいただく機会に恵まれ、自分の研究への理解と情熱をさらに深めることができました。大学院 4 年目にして初めての英語での学会発表ということもあり、大学院生活の中でも忘れられない印象深い学会となりました。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたり丁寧にそして熱心に御指導くださいました昭和大学歯科補綴学講座の馬場一美教授、口腔生化学講座の上條竜太郎教授と宮本洋一准教授をはじめ、ご協力いただきました全ての先生方と関係者の方々にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。また今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 5. 2014 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して

山口 哲

(大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座 (歯科理工学教室))

この度、大阪で開催されました第 62 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 学術大会におきまして「Fatigue resistance analysis of dental implants with different implant/abutment connections」という演題で発表させていただき、2014 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞いたしましたことを大変光栄に思います。JADR 会員ならびに役員の先生方に心より感謝申し上げます。

歯科用インプラントは、その表面性状の改質に伴って中期経過での生存率が向上し、欠損歯の治療法として現在広く利用されております。しかしながら、長期経過例ではインプラント体の破折などが報告されており、より予後良好なインプラント治療実現に向けた改善がまだ多く必要とされております。

通常、インプラントの力学的評価には疲労試験が実施されますが、市販製品はさまざまなデザインを採用しており、実際のところ、インプラントを構成するどの要素を制御することが破折抵抗性を高めるうえで有効であるかは明確になっておりません。そこで本研究では、インプラント体とアパットメントの代表的な二つの連結様式 (エクスターナルジョイント: EX とインターナルジョイント: IN) を取り上げ、デザインの差異をその部分だけに限定した CAD モデルを独自に設計して、*in vitro* と *in silico* の両面から比較検討することを発案しました。すなわち、前述の CAD モデルに基づいて造形したインプラント体での加速疲労試験を行うとともに、疲労亀裂発生初期過程で生じる金属結晶の転位に着目し、同モデルを用いた 3 次元有限要素解析によりインプラント体内の変位分布を検証しました。その結果、疲労破壊が生じるまでのサイクルと荷重は EX よりも IN の方が大きく、かつ疲労亀裂線の走行方向が 3 次元有限要素解析で求めた変位ベクトルの方向と良く合致していることを見出しました。これらの結果は、疲労破壊に対する抵抗性が IN の方がすぐれていることを、*in vitro* と *in silico* の両面から初めて明らかにした新しい知見となります。本研究の成果は、インプラントの長期耐久性という点で臨床的に有意義な情報を提示するものであり、デザインの設定を拡充するなど、さらなる発展的研究へと繋がるものと信じております。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導いただきました今里聡教授、キングス・カレッジ・ロンドンの Van Thompson 教授、ニューヨーク大学の Paulo Coelho 准教授に心より感謝申し上げます。

## VI. 2014 年度 JADR/Joseph Lister Award を受賞して

### 1. 2014 年度 Joseph Lister Award を受賞して

御厨 亜希

(広島大学歯学部歯学科 5 年生)

この度、2014 年度 JADR/Joseph Lister Award を受賞させていただいたことを大変光栄に思います。また、学部生の間にこのような貴重な体験をさせていただき、心より感謝申し上げます。

私の大学には研究コースというカリキュラムがあり、私は 4

年生の10月から7人の同級生とともに口腔顎顔面病理病態学研究室の先生方のご指導のもとで研究をしてきました。以前から癌の発症および進行メカニズム、治療法について興味を持っていましたので、本研究室で行っている“癌の進行における血管新生、浸潤、骨破壊に関わる因子”についての研究の中で、口腔癌の骨浸潤における VEGF の役割について研究させていただくことになりました。この間に多数の歯肉癌症例を免疫学的染色するとともに、骨破壊に関わる因子についても分子学的に解析しました。その研究成果として、この度、“Role of VEGF-Flt-1 signaling in bone invasion of oral cancer”という題目で発表させていただきました。合計100例を超える口腔癌症例の免疫学的染色結果とX線写真による骨破壊の程度を統計した結果、骨破壊と VEGF や Flt-1 の発現は相関していることが分かりました。また *in vitro* の実験から、癌細胞が VEGF を産生し、VEGF が前破骨細胞のもつ Flt-1 に結合することで破骨細胞への分化誘導をする経路に加え、VEGF が癌細胞自身のもつ Flt-1 に結合し、MMP-1 を産生することで、癌細胞表面に RANKL 発現が誘導され、前破骨細胞を破骨細胞へと分化させるという新たな経路が存在することが分かりました。今後、MMP-1 による RANKL 誘導のメカニズムについて、明らかにしていきたいと思っています。また、今回 JADR で発表させていただいたおかげで、他の分野の研究室の先生方にも質問やアドバイスをさせていただくことができ、その中で新たな視点や知識を得ることができました。これらも今後の研究に活かしていきたいと思うと同時に、このような貴重な機会を与えてくださった JADR の皆様にも大変感謝しております。今回、初めての学会発表ということで分からないことだらけであり、発表までの準備は大変でしたが、発表することに対する緊張も含めて、JADR に参加させてもらわなければ体験することのなかったことであり、参加させてもらって良かったと感じております。この経験は、今後の歯科医師としての人生の糧にもなると思います。

最後になりましたが、本研究に対してご指導いただきました口腔顎顔面病理病態学研究室の高田隆教授、宮内睦美准教授、歯科放射線科の藤田実准教授、顎・口腔外科の虎谷茂昭准教授、口腔顎顔面再建科の武知正見准教授、ならびにお世話になりました本研究室の先生方々に心より感謝申し上げます。

## 2. 2014年度 JADR/Joseph Lister Award を受賞して

高橋 一寿  
(鶴見大学歯学部歯学科3年生)

この度、2014年度 JADR/Joseph Lister Award を受賞させていただきましたことを大変光栄に感じております。

私の所属する鶴見大学では2013年度よりアドバンスゼミという研究コースが開設され、私は口腔生化学講座にてヒト唾液中のカリクレイン4 (KLK4) の同定および分離精製に関する

実験を行わせて頂きました。当初は学生実習に対する予習が出来ればという感じで実験を開始いたしましたが、実験を行っていくうちに得られた結果をどのように検討し、次なる実験への戦略をどのように立てるかという、研究の楽しさが分かるようになりました。学生実習では必ず結果が出るように先生方が準備をしてくださっているのに対して、研究では自分の予想した結果が必ずしも得ることが出来ないケースが多いということも知り、それに対する次なる実験への挑戦という積み重ねの努力を体験することが出来ました。また一旦実験を開始すると、助けてくれる同級生なしに自分自身で実験を遂行しなくてはならず、とても緊張しましたが、得られた集中力は将来歯科医師になるにあたっての大きな糧となったと思っております。

本研究室では、これまでにエナメル質、象牙質、骨のタンパク質および生理活性物質の研究に従事してきておりますが、私はエナメル質形成に重要なプロテアーゼであります KLK4 が近年マウス唾液顎下腺においても遺伝子が発現していることに注目して、ヒトの唾液に KLK4 が存在しているのではないかと仮説を立て、同定および分離精製に成功いたしました。今回の JADR では唾液 KLK4 の機能の一つとして、唾液に存在するマトリックスメタロプロテアーゼ (MMP) に対する分解能について検討を行い、歯周病時における MMP による歯周組織破壊への予防に対する可能性を見出しましたので、本研究を報告させていただきました。ポスタープレゼンテーションの際には、多くの他大学の先生方と討論を行うことができ、また多くのコメントやアドバイスもいただき、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。今後は将来の臨床応用に向けてさらに基礎的研究を重ねていく所存であります。

最後になりましたが、学部学生の期間にこのような貴重な機会を与えてくださりました鶴見大学歯学部口腔生化学講座の大井田新一郎教授、直接指導頂いた同講座の山越康雄准教授、また終始ご助言を頂きました口腔微生物学講座の前田伸子教授に心より感謝申し上げます。

## 3. Joseph Lister Award を受賞して

松田 真悠  
(大阪大学歯学部)

この度、第62回国際歯科研究学会日本部会で発表いたしました「Morphological and functional analyses of MSCs-construct incorporating vascular endothelial cells」という演題に対して、Joseph Lister Award を頂きましたことを大変光栄に感じております。また、学部学生の間に、このような貴重な機会を得ることが出来ましたことを大変有難く思います。

私は現在、大阪大学歯学部の4回生ですが、3回生の時の歯科理工学の授業で、細胞を試験管の中で組み立てて再生医療などに応用しようという研究があることを伺いました。実際、大阪大学の歯科理工学教室では、スキャフォールドを使用せ

ずに、様々な細胞と増殖因子だけを組み合わせることで骨様組織や歯髄様組織の三次元構築を目指す研究が行われているとのことで、その時から、この生体組織工学という研究テーマに強い興味を持ち、歯科理工学教室で研究をさせて頂くこととなりました。

今回の研究では、血管網を有する骨様組織の *in vitro* での構築を目的とした一連のプロジェクトの中で、未分化間葉系幹細胞から成る三次元細胞集合体に血管内皮細胞を導入することによって、細胞集合体にどのような変化が生じるかを検討しました。その結果、血管内皮細胞が三次元細胞集合体の内部で管腔様構造と網目状構造を形成すること、また、血管内皮細胞の導入によって間葉系幹細胞の生存率が向上することが分かりました。さらに、ALP 活性の測定や免疫蛍光染色の結果から、血管内皮細胞を導入することで三次元細胞集合体を構成する間葉系幹細胞の骨系分化が促進されることが明らかになりました。これらの結果は、細胞集合体内で間葉系幹細胞と血管内皮細胞が相互作用することによって、血管網を有する成熟した骨様組織が形成される可能性を示しています。今回の実験で得られた知見をもとに今後さらに研究を進展させ、より生体骨組織に近い生きた材料を *in vitro* で創製することが可能になれば、再生医療や創薬研究などに活用できるものと期待されます。

学部学生という立場であり、実際の実験に触れることも、英語で研究成果を発表することも初めてのことでしたが、多くの先生方のご協力のもと、好奇心と興味をもって楽しく取り組むことができました。最後に、この場をお借りしまして、本研究をご指導くださいました、大阪大学歯科理工学教室の今里 聡教授および佐々木淳一助教に心より感謝を申し上げます。

## Ⅶ. JADR Travel Award を受賞して

### 1. JADR Travel Award 2014

Dr.R.Venkat. MDS.,

(-Associate Professor and Research Scholar,

SRM Dental College, SRM University, Ramapuram, Chennai, India.)

JADR travel award is a great token of encouragement and incentive for young researchers like me. I was notified about this award and the process of application by the Indian Society of Dental Research, well in advance, following which I sent the abstract of my research on topic 'Management of Obstructive Sleep Apnea with Naso-Pharyngeal Appliance'. Indian Society of Dental Research head-office bearers – President Dr.Naseem Shah and Secretary Dr.S.M.Balaji were very helpful in selecting and encouraging me.

I have been doing research on this topic from year 2008, at SRM

University, Chennai, under guidance of Professors Dr.M.Vasanthakumar and Dr. D.Balakrishnan. A part of this study was done at Department of Oral Rehabilitation and Regenerative Medicine, Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Okayama, Japan.

I was very excited to visit Japan for the second time to receive this prestigious award at 62<sup>nd</sup> Annual meet of JADR. I did a poster presentation of my research findings and it was well received by the observers.

It was a very enriching experience for me both academically and on a personal note, as I learned so many new arenas of dental research by observing the presentations at the conference.

### 2. Hello! Dear friends,

OYUNKHISHIG Khishigdorj

(Dept. of Restorative Dentistry, School of Dentistry,  
Mongolian National Medical University)

My name is OYUNKHISHIG Khishigdorj, I'm an assistant lecturer at Mongolian School of Dentistry. My favorite field in dentistry is periodontology and we are trying to develop this field in our country. So we began give education about the periodontology disease, and tell them the ways to prevent from this disease to our patients and people and try them understand about blast of periodontology disease.

Even periodontology is developing in our country since 2000, but we made little researches, so we focus more on this area recently. I would like to say, 2014 has been an exciting year for me and for Mongolian Section of IADR. It was my first experience participate in IADR annual meeting in foreign country as a Japan. I loved Tokio and I could see and feel the kindness of Japanese people.

"I am incredibly grateful and appreciative to JADR for selecting me to receive the 2014 Travel Award. Receiving this award have given me added motivation to continue my academic journey. To me, this award demonstrates JADR generosity, faith in its members, and interest in our success. As the historian of my chapter, I have developed research skills and made friends with the some participants of 62<sup>nd</sup> annual meeting of JADR, and professional development events.

Thank you very much.

### 3. Experience of visiting Osaka, Japan on JADR Travel Award

Farhan Raza Khan  
(Member IADR and PADR  
Assistant Professor, Operative Dentistry  
Aga Khan University & Hospital  
Karachi, PAKISTAN)

This note has been written after my visit to Osaka, Japan at the 62<sup>nd</sup> annual meeting of Japanese Association of Dental research. One of my clinical studies titled "Postoperative Sensitivity in Conventional and Bonded Amalgam Restorations" was nominated for JADR travel award.

Although, I have travelled to countries like UK, USA, Egypt, and India but it was my first ever visit to Japan, so naturally some excitement was there. The sequence of events was unfavorable in the beginning as I missed my connecting flight at the Dubai airport thus reached Osaka late by 24 hours and later my luggage was lost too at the Kansai airport. However, all this despair was gone when I noticed that the staff at Kansai is far more concerned for my belongings than me. I felt that people are warm, humble and extremely caring.

The next challenge was the language barrier and my inability to read signboards that was written in the native script. For this reason, I took a cab to my hotel rather than the travel advisory recommended train. On the conference day, I was amazed by listening to the world class presentations delivered by researchers and faculty members. Then visiting to the poster presentation hall was an eye opener. I observed that abstracts were submitted not only from Japanese dental schools but from China, Korea, Thailand, Malaysia, Philippines and some other countries. In the evening, I was awarded with the prestigious award along with the cash prize of 70,000 Yen. The honor was fortified by the fact that I got an opportunity to meet Prof Shinya Mukrami and other noble researchers.

With the good luck turning on in my favor, I got phone call from the Kansai that my luggage was found too. Although, I had a short stay in Osaka but I can easily attribute the city with the scenic view of Osaka castle, highly organized traffic, disciplined society and hospitable people. The warm welcome that I receive in the cold weather of Osaka is indeed an experience that I will ever cherish.

### 4. JADR Travel Award

Sarah SW Wong, PhD  
(Oral Biosciences, Faculty of Dentistry,  
University of Hong Kong, Hong Kong)

I would like to express my deepest gratitude to JADR for offering me the Travel Award. Although I have been to Japan several times, I have never been to the Kansai area, which is an important area in the

history of Japan. I was thrilled that the JADR meeting in Osaka brought me to this part of Japan, which is famous for its historical background, spectacular scenery and heavenly cuisine. On the other hand, Japan is one of the leading countries for dental research. To be able to come close to the high-quality research of the fellow researchers from the Japanese Division is an absolutely precious opportunity to a young researcher like me. I am particularly impressed by the periodontology symposium given by Prof. Koji Nakayama (Nagasaki University), Prof. Kenji Matsushita (National Institute for Longevity Sciences), and Prof. Akihiro Yoshihara (Niigata University), who discussed their pioneering work on the relationship between systemic diseases and periodontitis. Furthermore, it was my greatest honour and pleasure to meet the respectable and very friendly Prof. Yasuko Momoi (Tsurumi University) during the Member's Reception. The meeting reminded me of the visiting students from Tsurumi University, whom I had a nice time working with in our faculty. The 62<sup>nd</sup> JADR meeting was such a memorable experience. I eagerly look forward to joining again.

### Ⅷ. 第33回 KADR 韓国部会 (KADR) 学術大会報告

栗原 英見

(広島大学大学院医歯薬保健学研究院応用生命科学部門 歯周病態研究室)

Korean Division of the International Association for Dental Research (KADR), The 31<sup>st</sup> General Meeting は 2014 年 11 月 29 日に国立ソウル大学歯学部および歯学部附属病院で開催されました。大会の前日の 28 日にはソウル大学病院のレストラン "Garden View" で懇親会が開催され (写真 1), IADR 会長の安孫子宜光先生の御挨拶, 2016 年の IADR Seoul 大会 LOC の Min 先生の御挨拶もありました。29 日当日朝の開会式には歯学部学生による木管五重奏の演奏があり (写真 2) JADR のオープニングとは違った雰囲気が始まりました。KADR 会長の Kim, Kang-Ju 先生 (写真 3), IADR 会長の安孫子宜光先生の御



写真 1. 安孫子 IADR 会長, Kim, Kang-Ju 先生 (KADR 会長)

挨拶があり、Kim, Kang-Ju 先生は IADR Seoul 大会に向けて Korean Division の活性化の重要性を訴えられ、安孫子先生は IADR の新しい方向性についての御説明という内容でした。午前中に特別講演 3 題が連続して行われました。最初に安孫子先生が “Strategy of the molecular target therapy against Dental Caries : The replacement therapy and the passive immunotherapy” と題して講演され、次にフロリダ大学の Marc W. Helt 先生が “Declines in oral health and functioning with aging : Pervasive but variable” と題して講演され、最後に栗原が “Brain-derived neurotrophic factor (BDNF) for periodontal tissue regeneration” というタイトルで講演させて頂きました。



写真 2. 歯学部学生による木管五重奏の演奏



写真 3. 熱弁を振るう Kim, Kang-Ju 先生 (KADR 会長)



写真 4. 壇上で表彰される若い研究者達。これが 5 回くらい繰り返された。

メイン会場はソウル大学歯学部附属病院の 400 人弱の収容人数のホールでした。聴衆に若い研究者が非常に多くいました。液晶プロジェクターの設定が悪かったせいか、スライドの色が悪く、ピントが甘かったのが残念でした。午後からは Hatton Award の選考(応募 17 演題), Johnson & Johnson Award(応募 7 演題)の選考、口頭発表が 65 演題、ポスター発表は 128 演題でした。口頭発表、ポスター発表は韓国語で行われていました。印象的だったのは若い研究者の参加が多かったこと、閉会式で行われた若い研究者の表彰人数が極めて多かったです(写真 4)。皆笑顔で時に歓声が沸き起こっていました。2016 年の IADR Seoul 大会に向けての若い研究者を盛り立てようとする KADR の意思が強く表れていると感じる印象深い閉会式の様子でした。

## IX. 理事会, 評議員会および総会報告

JADR 幹事 佐藤 拓一

(東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座口腔生化学分野)

2014 年度の理事会は、2 月 17 日、5 月 19 日、8 月 25 日、12 月 3 日の計 4 回開催された。

評議員会および総会は、第 62 回 JADR 学術大会時の 12 月 4 日に、会場である KKR ホテル大阪(大阪市)において開催された。会の冒頭で評議員会成立のための定足数を満たしていることが確認され、石原和幸先生(東京歯科大学)の 1 名が議事録署名人として選出された。

以下、評議員会および総会において決定された 2015 年度の事業計画および予算案等について報告する。

### 1) 2015 年度事業計画について

以下の 2015 年度事業計画が提案され満場一致で承認された。

理事会 : 4 回開催 (2, 5, 8, 10 月)

評議員会・総会 : 第 63 回学術大会開催時 (10 月)

学術大会 : 第 63 回学術大会

: 10 月 30 ~ 31 日に福岡国際会議場にて開催

: 大会長 中村誠司(九州大学大学院歯学研究科口腔顎顔面外科学分野)

各種委員会 : JADR/GC 学術奨励賞選考委員会, JADR Joseph Lister Award 選考委員会

Newsletter : 年 2 回発行 (3 月, 9 月発行予定)

Mail News : 年 4 回程度を予定

日本歯科医学会理事会出席 (陪席)

KADR 学術大会へ講師派遣

IADR 2015 年度評議会へ役員派遣

APR 2015 年度運営委員会へ役員派遣

2016 年度 Hatton Award 候補者選考

IADR 各種 Committee 委員へ JADR 会員推薦

IADR 本部へ JADR Annual Report 提出

2) 2013 年度会計決算および 2015 年度会計予算(案)について  
会計決算は、小田 豊監事ならびに高野吉郎監事による監査承認後、第 1 回理事会承認を経て、評議員会および総会において満場一致で承認された。2015 年度会計予算案は、第 4 回理事会で承認を経て、評議員会および総会にて満場一致で承認された。

3) 次期役員および評議員について

役員選出規程に従い、下記の JADR 次期役員(案)が上程され、第 4 回理事会の議をへて、評議員会および総会で満場一致で承認された。また役員選出規程に従い JADR 次期評議員の選出が行われ、理事会承認をへて会長がこれを委嘱した。任期はいずれも 2015 年 1 月 1 日から 2016 年 12 月 31 日まで。

役員名簿 (2015-2016)

会長	高田 隆	広島大学大学院医歯薬学総合研究科口腔顎顔面病理病態学
副会長	山崎 和久	新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野
会計理事	今里 聡	大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座(歯科理工学教室)
前会長	高橋 信博	東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座口腔生化学分野
理事	中村 誠司	九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面外科学分野
理事	森山 啓司	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面矯正学分野
理事	上條竜太郎	昭和大学歯学部口腔生化学教室
理事	石原 和幸	東京歯科大学微生物学
理事	江草 宏	東北大学大学院歯学研究科分子・再生歯科補綴学分野
理事	小方 頼昌	日本大学松戸歯学部歯周病学
理事	津賀 一弘	広島大学大学院医歯薬保健学研究科先端補綴学
理事	林 美加子	大阪大学大学院歯学研究科歯科保存学教室
監事	高野 吉郎	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織構造生物学分野
監事	村上 伸也	大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座口腔治療学教室

評議員名簿 (2015-2016)

北海道医療大学	安彦 善裕
北海道大学	吉田 靖弘
岩手医科大学	佐原 資謹

奥羽大学

東北大学

明海大学

日本大学松戸歯学部

東京医科歯科大学

東京歯科大学

日本歯科大学

日本大学

昭和大学

神奈川歯科大学

鶴見大学

新潟大学

日本歯科大学新潟生命歯学部

松本歯科大学

朝日大学

愛知学院大学

大阪歯科大学

大阪大学

岡山大学

広島大学

徳島大学

九州歯科大学

九州大学

福岡歯科大学

長崎大学

鹿児島大学

清浦 有祐

島内 英俊

須田 直人

河相 安彦

小野 卓史

新谷 誠康

志賀 博

松村 英雄

馬場 一美

浜田 信城

大久保力廣

井上 誠

新海 航一

増田 裕次

村上 幸孝

千田 彰

山本 一世

矢谷 博文

窪木 拓男

栗原 英見

松香 芳三

安畑 敏弘

石川 邦夫

阿南 壽

中山 浩次

野口 和行

4) 終身会員推挙について

会則に従って、以下の会員(敬称略)が理事会より終身会員として推薦され、評議員会および総会において満場一致で承認された。

恵比須繁之

加藤 有三

小松 久憲

篠原 光子

高橋 義一

高橋 好文

丹根 一夫

鳥居 光男

中原 泉

中村 洋

島 銀一郎

林 弘之

林 宏行

福島 久典

水口 清

5) 2015 Hatton Awards 候補者の紹介

2014 年度第 3 回理事会で決定された、2015 IADR Boston 大会 Hatton Awards 日本代表候補者 4 名（五十音順、敬称略）が紹介された。

Senior Basic Science Category

木山 朋美

（東北大学歯学研究科博士課程 4 年）

中島麻由佳

（新潟大学医歯学総合研究科歯周診断・再建学分野）

古川 祥子

（九州大学大学院歯学府口腔顎顔面病態学講座）

Junior Category

真喜志佐奈子

（新潟大学歯学部）

X. 第 63 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会開催のご案内

大会長 中村 誠司

（九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面病態学講座顎顔面腫瘍制御学分野）

会 期：2015 年 10 月 30 日（金）～ 10 月 31 日（土）

会 場：福岡国際会議場

〒 812-0032 福岡市博多区石城町 2-1

TEL.092-262-4111

大会長：中村 誠司

（九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面病態学講座顎顔面腫瘍制御学分野）

準備委員長：川野 真太郎

（九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面病態学講座顎顔面腫瘍制御学分野）

内 容：特別講演、シンポジウム、ランチョンシンポジウム、ポスターセッション、展示、その他

XI. 第 93 回 IADR 総会・学術大会 (Boston, Mass., USA) のレポーター募集

2015 年 3 月 11 日（水）～ 14 日（土）、Boston, (Mass., USA) で第 93 回 IADR 総会・学術大会が開催されます。つきましては、JADR 会員の先生方から IADR 大会の様子など 9 月発行予定の JADR Newsletter 第 2 号にご紹介いただきたくご案内いたしま

す。総会へ初めて参加される方からでも大歓迎です。

レポーターをお引受けいただける先生は、大会報告を 3 月 31 日（火）までに事務局へお送り下さい。多数お待ちしております。

字 数：1200 字程度 締切：5 月 15 日（金）

執筆内容：第 93 回 IADR Boston 大会に各自が参加した分野の報告。シンポジウム、ポスター、口頭発表などから自由に記載（過去のニュースレター参照）

原稿送付方法：TEXT file か MS WORD で、E-mail にて事務局へ送付

XII. IADR Hatton Award 応募候補者 (2016 年度 IADR, Seoul, Republic of Korea) の募集

2016 年度の Hatton Awards 応募候補者を募集します。応募ご希望の方は 6 月以降に Website に掲載します応募要領をご覧の上ご応募下さい。

本賞は第 10 代 IADR 会長 Edward Hatton 博士の功績をたたえて設けられた若手研究者を顕彰するための賞です。応募カテゴリーは、Junior 部門、Senior- Basic Science 部門、Senior-Clinical Research 部門の 3 部門です。各 Division から推薦を受けた候補者は第 93 回 IADR 総会の前日に行われる Hatton Awards 本選にて審査を受け、各部門上位 2 名が順位付けで受賞者に選ばれます。

なお、各部門への応募資格と研究内容の区分は、以下のようになります。

Junior 部門：

歯学部学生による研究発表です。歯学部在籍中に行った研究が対象となります。基礎研究、臨床研究を問いません。

Senior 部門：

大学院在籍者、研究生、専攻生等による研究発表です。博士号既得者の場合、本選時に博士号取得後 3 年以内であれば応募できます。

Senior 部門は、下記 2 つの分野に分かれます。

- ・ Basic Science Research: Involving laboratory or animal research
- ・ Clinical/Pre-clinical Research: Involving research on human subjects and/or epidemiologic studies

## CONTENTS

I. 国際歯科研究学会日本支部 (JADR) 会長としての御挨拶	1	I. Greetings of the New JADR President Dr. Takashi Takata : JADR President	1
II. JADR 会長任期を終えて	2	II. Experience as President of JADR Dr. Nobuhiro Takahashi: JADR Immediate Past President	2
III. 退任理事からの挨拶		III. Greeting from Director retirement	
1. 理事退任にあたり	3	1. On the JADR Director retirement Dr. Keiichi Sasaki: JADR Past Director	3
2. JADR 理事退任ご挨拶	4	2. On the JADR Director retirement Dr. Atsuo Amano: JADR Past Director	4
3. JADR 理事を退任するにあたり	4	3. On the JADR Director retirement Dr. Shunichi Shibata: JADR Past Director	4
4. 学術奨励賞の選考を担当して	5	4. On the JADR Director retirement Dr. Yasuko Momoi: JADR Past Director	5
IV. 第 62 回 JADR 総会・学術大会報告		IV. Reports of the 62nd JADR General Session	
1. 第 62 回国際歯科研究学会日本部会総会・学術大会を終えて	5	1. Summary of the 62nd Annual Meeting of JADR Dr. Shinya Murakami: Chairman of the 62nd Annual Meeting of the Japanese Division of the IADR (JADR)	5
2. Reconsideration of the Periodontal Medicine Research: Interface between Epidemiological findings and Pathogenic Mechanisms	6	2. Reconsideration of the Periodontal Medicine Research: Interface between Epidemiological findings and Pathogenic Mechanisms Dr. Kazuhisa Yamazaki: Niigata Univ.	6
3. New Frontiers of Bone and Mineral Research in Dentistry	6	3. New Frontiers of Bone and Mineral Research in Dentistry Dr. Riko Nishimura : Osaka Univ.	6
4. The new horizons for dental treatment opened up by biomaterials research	7	4. The new horizons for dental treatment opened up by biomaterials research Dr. Akira Yamaguchi : Tokyo Med. Dent. Univ.	7
V. 2014 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して		Dr. Satoshi Imazato: Osaka Univ.	7
1. Functional tooth restoration by next-generation bio-hybrid implant	7	V. 2014 JADR/GC Young Investigator Award	
2. 2014 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して	7	1. Dr. Masamitsu Oshima: Okayama Univ.	7
3. 2014 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して	8	2. Dr. Miho Ohta: Kyushu Univ.	7
4. 2014 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して	8	3. Dr. Hiroki Takeuchi: Osaka Univ.	8
5. 2014 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して	9	4. Dr. Marie Hoshino: Showa Univ.	8
VI. 2014 年度 Joseph Lister Award を受賞して		5. Dr. Satoshi Yamaguchi: Osaka Univ.	9
1. 2014 年度 Joseph Lister Award を受賞して	9	VI. 2014 JADR/Joseph Lister Award	
2. 2014 年度 JADR/Joseph Lister Award を受賞して	10	1. Dr. Aki Mikuriya: Hiroshima Univ.	9
3. Joseph Lister Award を受賞して	10	2. Dr. Kazutoshi Takahashi: Tsurumi Univ.	10
VII. JADR Travel Award を受賞して		3. Dr. Mayu Matsuda: Osaka Univ.	10
1. JADR Travel Award 2014	11	VII. JADR Travel Award 2014	
2. Hello! Dear friends,	11	1. R. Venkat SRM University (India)	11
3. Experience of visiting Osaka, Japan on JADR Travel Award	12	2. Dr. OYUNKHISHIG Khishigdorj : Mongolian National Medical Univ.	11
4. JADR Travel Award	12	3. Dr. Farhan Raza Khan: Aga Khan University & Hospital (Pakistan)	12
VIII. 第 33 回 KADR 韓国部会 (KADR) 学術大会報告	12	4. Dr. Sarah SW Wong: University of Hong Kong	12
IX. 理事会、評議員会および総会報告	13	VIII. Report of the 31th KADR Academic meeting Dr. Hidemi Kurihara: Hiroshima Univ.	12
X. 第 63 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会のご案内	15	IX. Report of the Board Meeting, Annual Business Meeting and the Councilor Meeting Dr. Takuichi Sato: Tohoku Univ.	13
XI. 第 93 回 IADR 総会・学術大会 (Boston, Mass., USA) のレポーター募集	15	X. Announcement of the 63rd JADR General Session Dr. Seiji Nakamura: Kyushu Univ.	15
XII. IADR Hatton Award 応募候補者 (2016 年度 IADR, Seoul, Republic of Korea) の募集	15	XI. Call for Reports of the 93rd IADR General Session in Boston	15
		XII. Call for the Hatton Awards Competitors of the 94th IADR General Session in Seoul, Republic of Korea (2016) from JADR	15

## ●編集後記●

今号より、高田会長より JADR Newsletter の編集を引き継がせていただくことになりました。2014 年末をもちまして高橋信博先生が 2 年間の任期を終え、JADR 会長を退任され、2015 年 1 月より高田隆先生を会長とする新執行部がスタートしました。本号では高橋前会長から退任のご挨拶として 2 年間の総括と今後の活動に対するご示唆をいただきました。世界第 2 位の規模の IADR division とは言え、国内・国外で幅広い活動を行っている学会としては会員数も予算も少なく、歴代会長同様、運営に苦労があったと拝察いたします。加えて、2014 年を以て 4 名の先生が理事を退任されました。これらの先生方から会員に送られたメッセージには JADR に対する熱い思いが込められています。また、第 62 回 JADR 総会・学術大会の報告が記載されています。大会長の村上伸也先生のご尽力により JADR ならではの学際的シンポジウムの企画をしていただき、多数の参加者を集め、成功裏に終了いたしました。今後も JADR の広報、意見交換の場としてニュースレターを活用して行きたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

発行 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) <http://jadr.umin.jp/>

連絡先: 〒 612-8082 京都市伏見区両替町 2-348-302

アカデミック・スクエア (株) 内 TEL: 075-468-8772 FAX: 075-468-8773

JADR 副会長 山崎和久 (新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野)

連絡先: 〒 951-8514 新潟市中央区学校町通二番町 5274 FAX: 025-227-0744

2015 年 3 月 1 日 発行